体育系大学における女子学生の「生きにくさ」
～学校適応と戦略的行動～

野村早紀　　笹生心太

キーワード：女子学生，人間関係，生きにくさ

"Live difficulty" of female students in physical education university
~ School adaptability and strategic action ~

Saki Nomura　Sinta Sasao

Abstract

In this study, the "living difficulty" of the female students who belong to physical education university, was conducted a questionnaire survey and interviews. Female students are acting in dependence on the two axes of "Sporting Code" and "gender code", it was possible to be classified into six types the results women students of behavior patterns of investigation. Each type of female students, had a variety of strategic action in order to facilitate more familiar yourself to college.

Key Words：Female student，Human relations，Live difficulty

１．はじめに

筆者はこれまで約６年間、宮城県にあるＳ大学という体育系大学に在籍してきた。ここでは大半の学生たちは、必要以上にジャージを着用することによって、スポーツへのコミットメントが高いという共通の認識を得ていた。彼らは、より自分自身を大学に馴染みやすくするために、「ジャージ」という服装を１つの戦略として捉えている。その一方で、スポーツへのコミットメントを高める機会を失いつつも、大学に私服で通学し、化粧やおしゃれをしている女子学生たちがいる。

このようにＳ大学には２種類の学生が混在し、特に後者の女子学生たちにとっては、体育系大学で生きることに「違和感」を覚えているのではないだろうか。筆者がこれまでの自身の学生生活を振り返って感じたことを踏まえ、本学の女子学生たちを見てみると、大学に思うように適応できていないという「生きにくさ」が見受けられる。体育系大学に所属する女性は、その「生きにくさ」に対抗するために、何らかの戦略を用いて特殊な文化（反抗文化）を形成しているのではないかと考えられる。

２．先行研究

(1)学校適応に関する研究

谷島(2005)は、近年学生同士の人間関係の問題から学校不適応な学生が増加していることを指摘し、主に女子学生に多く見受けられる状況であることを説いている。また吉岡(2010)は、そうした人間関係の問題が、実際の学生相談の中での多くの割合を占めているにもかかわらず、個人の認識によって決まるデリケートな問題であることから、学校側からの改善は難しいことを指摘している。

(2)女子学生の人間関係に関する研究

上床(2011)は、中学校の教室に焦点を置き、集団の構成員が共有している掟や暗黙のルールを「コード」と定義している。この「コード」が、生徒同士の行為を互いに正当化するために重要な解釈的枠組として機能していることから、「いじめ」につながる可能性もあることを指摘している。また山田・藤原・小川(2002)は、女子大学生が従うべき「コード」について分析し、女子大に通う学生たちは、過剰な「女子大生イメージ」に晒されることにより、体験的にジェンダーについて考察する機会を得ると指摘している。

３．課題と分析視角の設定

(1)課題設定

先行研究から、大学生がより大学に適応するためには学力面と人間関係面との２つの要素が重要になってくるが、特に女子学生の学校適応を高めるためには、後者の人間関係が重要だと言えることが分かった。

また人間関係を良好に保つためには、ある特定の集団において、その集団の構成員たちの間で共有されている「掟」や「ルール」があるとされている。これが特定の集団内において互いの行為を正当化するために重要な「解釈的枠組」として捉えられており、人間関係を良好に保つうえで重要な役割を果たしているということも分かった。

こうした「コード」の存在は、近年注目が集まっている「スクールカースト」（鈴木,2012）の形成にも影響を与えていると考えられ、学生たちの良好な人間関係の構築に重要な意味をもっていると考えられる。「コード」は大学生の人間関係にも影響を与えていると考えられ、特に女子学生は彼女たちの独特な「コード」を形成していると言える。

具体的には以下の２点について明らかにすることで、体育系大学に所属する女子学生の「生きにくさ」を説明したい。

課題①
女子学生は、本当に体育系大学への「生きにくさ」を感じているのか、その実態を記述する。
課題②
女子学生は、そういった「生きにくさ」を如何にして回避しているのか、その戦略を明らかにする。

(2)分析の視角
上記の２つの課題を解くために、先行研究の知見を活用したい。体育系大学に所属する女子学生は、２つの「コード」に沿って行動していると考えられる。１つは体育系大学に所属する学生として求められるスポーツへのコミットメントを高める行動の仕方である。これを本稿では「スポーツコード」と呼びたい。もう１つは、「女性は女性らしくあるべき」という女子学生特有の行動の仕方である。本稿ではこれを「ジェンダーコード」と呼ぶ。この２つの「コード」に従って行動しようとするうちに、体育系大学に所属する女子学生たちに「生きにくさ」が生まれていると考えられる。本研究ではこの２つの「コード」を軸に、学生の行動パターンを４種に分類する。それぞれのパターンの女子学生が、如何にして人間関係を良好なものとしながら学校に適応しようとしているのか、またそれぞれの学生が絶えず外界からの「目（まなざし）」をどのように意識しながら大学生活を過ごしているのか、その「生きにくさ」に対する戦略的行動について明らかにしたい。

４．分析の方法

(1)質問紙調査
体育系大学に所属する女子学生の現状を包括的に理解するために、２つの「コード」に、馴染みきっていない新入学生を対象として、質問紙調査を行った。

母集団：Ｓ大学１年生の女子学生
サンプル抽出方法：全数調査
配布数：108 枚
回収数：108 枚（回収率 100％）
実施日：平成 26 年８月１日・５日・６日
（1 年生の必修授業前）

(2)インタビュー調査
女子学生たちの服装・化粧・髪型などを指標に、２つの「コード」への従属度を判断した。具体的な４種の行動パターンに該当すると思われる女子学生をピックアップし、調査により協力的な学生を対象に、実際に女子学生たちへのインタビュー調査を実施した。その際には、改めて上記質問紙調査を実施し、各対象者がどのカテゴリに属しているのかを確認した。

対象：Ｓ大学 1～4 年生の女子学生 20 名
内容：「体育系大学に女性として在籍することの難しさ」（女性らしさ・ファッション・進路・大学生活・人間関係等について）
時間：90 分（授業１コマ分）
実施日：平成 26 年 10 月下旬～12 月中旬

５．「生きにくさ」の実態

質問紙調査では、「女性らしさ」に関する設問に対する答えを「ジェンダーコード」への従属度、「スポーツ」に関する設問に対する答えを「スポーツコード」への従属度の指標とし、それぞれ５件法で回答してもらった。得点を 25 点満点で算出し、中央値である 15.0 点を基準線として、これ以上をコードに従っている学生、これ以下を従っていない学生と定めた。以上の作業の結果、Ｓ大学１年生の女子学生を、以下の４つのパターンに分類することができた（図 1.）。

４分類に該当する学生は、「スポーツ女子」12 名、「女子大風女子」が 18 名、「体育会系女子」が 64 名、「控えめ女子」が 14 名であった。

そして、これら４種の学生たちが、どの程度学校に適応できているかを示すために、「大学生活」に関する質問項目への回答（5 件法）を利用した。その結果、「スポーツ女子」の平均点が 19.5 点、「女子大風女子」の平均点が 16.8 点、「体育会系女子」の平均点が 18.5 点、「控えめ女子」の平均点が 17.4 点、そして全体の平均点が 17.6 点となった。

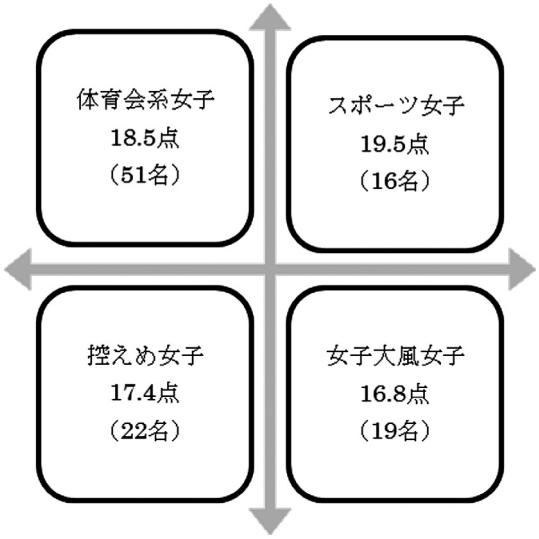

図1. S 大学1年生の女子学生の
4類型と学校適応度の平均点

６．「生きにくさ」の回避戦略

【Ａグループ（「スポーツ女子」型）】

「スポーツ女子」は、二面性があることが何よりも大きな特徴である。

「私は大学の近くにアパート借りてるので、大学にはほとんどジャージで行きますね。大学の近くだと、まわりもみんなジャージなので安心します。でもそのかわり、なるべくかわいいジャージを選んでます！基本的にピンク系の、ミニーちゃんとかのだったら良いかなって」。

このように意識して、「スポーティー」な自分と、「女性らしい」自分を、バランス良く演出している傾向にあり、恋愛や、異性に対しても積極的な一面をみせている。しかし、男子学生と親しく接することができるが故に、周りの女子学生から羨ましがられたり、時には妬みの対象として見られる場合もあるという。

「やっぱり、同じ部活とか、似たような競技やってると仲良くなりますよね。野球とソフトとかでも、よくキャッチボールしたりしますし。そういうの、部活してない子とかからすると、男の子と『チャラチャラしてる』って思われてるみたいですね」。

しかし、彼女たちはあまり人間関係に固執し過ぎないという方法で、大学への適応度を高めている。そして、2 つのコードのどちらにも従属している「スポーツ女子」は、他のグループと比べて、大学生活に対して不満を持っている学生は少なかった。

また「スポーツ女子」は、自分が理想とする「自分」であろうとする、もしくは「絶対になろう」という意志の強さが、インタビュー内容からも分かった。

「ほんとはコンプレックスたくさんあって、可愛い子とかみると、すっごく落ち込みます。でも、負けてらんないので、可愛くなれるように、日々努力！努力！努力！ですね」。

やはり、一般的に「スポーツができる」ということは、継続性があり、目標に向かって努力を惜しまず、諦めずに最後まで取り組むことができるということであると考えられる。彼女たちは、スポーツだけではなく、女性らしくあり続けることにも、努力し続けることができている。4 種の女子学生の中で、最も充実した大学生活を、送ることができているのではないだろうか。

【Ｂグループ（「女子大風女子」型）】

「女子大風女子」は、化粧やおしゃれに常に気を遣い、体育系大学に毎日私服で通学

している。またサークルに所属している者もいるが、意欲的に参加している者は少ない。そのためスポーツ活動の時間はほとんどなく、ジャージを着る機会もほぼないに等しいという。

「体育大でも毎日頑張っておしゃれしてます！やっぱりジャージは楽ですけど、可愛くないですよね。おしゃれ大好きです！」。

また男子学生が圧倒的に多い環境の中で生活することに、戸惑いを感じている女子学生も多く、恋愛に対しても積極的な学生ばかりではなかった。進路に関しては、ヨガのインストラクターや銀行員、調理師や栄養士といった、いずれも女性的な職種が多くあった。さらに大学での生活や人間関係においての話を聞いてみると、女性同士の人間関係における悩みが、他のグループと比べてみても圧倒的に多くあった。

「女子同士だと、いろいろあるんですよね。すっごい気遣わないといけない・・・人によりますけど、私はけっこうそういうの気にしちゃうほうなんで、空気とかで、『あ、今日ここケンカしてる』とか。だいたいみんなグループで行動してるので、周りも気遣いますし」。

インタビューの結果、「女子大風女子」は女子学生同士の人間関係の悩みや、体育系大学に所属していながらも、スポーツに取り組んでいないことによる居場所感の無さを気にしているような発言が多くあった。このことから、大学に思ったように適応できていないように思える。

「これはこれでいいって思ってますね。人と同じことするの嫌いですし、みんなジャージだから、あえて私服で来てやるっていうか、ちっちゃい反抗って言いますか・・・」。

「良くも悪くも、体育大に私服だと目立ちますよね。なんかそのちょっと浮いた感じが逆によかったりします。授業のときに教室いくと、私服グループでいたりすると、周りの視線感じたりとか」。

しかし、そうした「学校不適応」に対して、あえて周りに迎合しないこと、もしくは同じタイプで集まって行動することによって心の拠り所ができ、自信に繋がるという。むしろ周りの学生がジャージで通学している中、自分たちは私服で大学に来ているということに一種の「優越感」のようなものを覚えているという発言もみられた。

しかし、こうした「女子大風女子」の戦略は、一種の抵抗であり、根本的な「生きにくさ」の解決には至ってはいない。

【Ｃグループ（「体育会系女子」型）】

大きく分けて２つのタイプの学生がいる。１つ目のグループ（Ｃ－１）は、体育系大学に所属する女子学生として、充分にスポーツができる環境にあることに満足している。そしてもう１つのグループ（Ｃ－２）は、自らの「女性らしさ」の欠如を理解しており、同じくスポーツ活動に熱心に取り組みながらも、「ジェンダーコード」にも従属し、おしゃれで可愛い「スポーツ女子」に憧れを抱いている学生のグループである。

Ｃ－１グループは、大学生活全般に対して小さな不満はあるものの、それは体育系大学に限られたものではなく、大きな問題ではないかと思われる。

「女だからって、体育系大学に所属することが難しいと感じたことはないですね。元々あまり女っぽくない性格ですし、あまり大変だと思ったことはないです。むしろジャージでいいし、化粧とかしなくても何も言われてないし、それが普通だから楽でいいと思ってます」。

Ｃ－１グループは、スポーツにやりがいを見出しており、「ジェンダーコード」を気にしないという戦略を通して、学校への適

応を行っていると考えられる。

それに対してＣ－２グループは、スポーツに全力で取り組んでいながらも、周りから女性的な扱いを受けていないことや、自らの「女性らしさ」の欠如に不満や悩みを抱えている様子であった。

「部活があるので、自然と毎日ジャージで過ごしてます。他大学の女子とかと比べると、やっぱり『女子力』は低いと思います。でも、ジャージに化粧をわざわざする必要もないかなと思ってしまうので、部活してもちゃんと女の子らしくしている子たちのこともっと見習わないといけないなと思ってます」。

「部活でも周りに男子が多いので、女性扱いされることがあんまりないです。性格もけっこうサバサバしてるので、相手が誰でも思ったこととかはすぐ口に出してしまいます。そのせいで、女の子っぽい子と接するのが苦手ですね」。

Ｃグループ全体に言えることは、進路に関しては、ほとんどが保健体育科の教員、もしくはプロスポーツに進むことであり、当たり前のことではあるが、「スポーツコード」への従属度の高さがこのことからも読み取ることができる。また恋愛に対しては、奥手になっている学生が多く、あまり自らの恋愛事情については語りたがらなかった。

そして学校適応については、先述したように、Ｃ－１グループの学生は、スポーツに没頭し、周りや異性の「目（まなざし）」を気にしてはいないため、大学によく適応できていた。それに対してＣ－２グループは、思うように大学に適応できていないように受け取ることができた。彼女たちは、スポーツをしながら女性らしく在りつづける「スポーツ女子」の存在に憧れを抱き、「スポーツ女子」となるべく行動に移す戦略をとるべきか、このまま「体育会系女子」として、スポーツに打ち込み続けるべきかを悩んでいる様子であった。

【Ｄグループ（「控えめ女子」型）】

「体育会系女子」と同様に、２つのタイプの学生がいると言える。

１つ目のグループ（Ｄ－１）は、「スポーツコード」と「ジェンダーコード」のどちらにも従属しておらず、大学生活全般において、満足していない傾向にある女子学生のことである。中には大学に思うように馴染むことができず、辛い思いをしたという声もあった。しかし、そうした現状に自分ではどうすることもできず、解決しようという意欲も失ってしまっている状況にある。

そしてもう１つのグループ（Ｄ－２）は、インタビュー調査の発見とも言えるべきグループである。当初、学校適応度が低いと考えられていた「控えめ女子」の中で、自らの居場所を自己開拓することができたことによって、大学生活においてのモチベーションの向上につながり、結果として「生きやすさ」につながったのではないかと考えられる。大学でボランティア活動の楽しさを知り、意欲的に活動し、その中でやりがいを感じている様子であった。

「いつも行ってる仮設でお世話になってるおばあちゃんがいるんですけど、私がボランティアに行くとすごく嬉しそうにしてくれているんです。それが私も嬉しくて、おばあちゃんに会いにボランティアしているようなところも正直ありますかね」。

「ボランティアしてるのは、自分のためでもあるんですよね。将来はガチで教員目指しているので、現場での経験にもなるし、何より子どもたちが可愛くて可愛くて。ちゃんと教員になれるように、勉強頑張ろうってやる気が出ます！」。

このように、仮設住宅に住む高齢者、ボランティア先の学校の子どもたちといったよ

うに、ボランティア先での方々との出会いがあり、より一層、ボランティア活動に取り組む意欲を掻き立てていることが分かる。また活動を通して、自らのモチベーションの向上にも繋がっている。逆に、現状を打破しようとせず、行動に移すことができなかったＤ－１グループは、学校不適応を回避する「戦略」を見つけることができず、大学生活に不満の多いままとなってしまった。

以上のようなインタビュー調査の結果から、「控えめ女子」の「生きにくさ」に対する実践的な「回避戦略」を明らかにすることができた。

７．考察

インタビュー調査の結果から、体育系大学に適応できていると考えられるのは、Ａ・Ｃ－１・Ｄ－２の３つのグループであった。ＡグループとＣ－１グループの学校適応度の高さは、予想の範疇であったが、Ｄ－２グループの学校適応度の高さは、本稿での新たな発見となった。体育系大学とは言っても、スポーツに限らず自分なりに打ち込めるものを見つけるということが、自らの大学での「居場所」になり、その居場所感が学校適応につながったのであろうと考えられる。今回のＤ－２グループの事例では、たまたまそれがボランティア活動であった。このようなＤ－２グループの事例は、今後の女子学生たちの学校不適応を引き起こさないための対策としても、十分に参考にできる結果となった。このような学生の「居場所」を、今後大学側から提供していくことも重要になってくると考えられる。

次に、あまり大学に適応できていない、学校適応度が低いと考えられるのは、Ｂ・Ｃ－２・Ｄ－１グループであった。まず、ＢグループとＤ－１グループについて説明したい。どちらもスポーツ活動には取り組んでおらず、かといって他に打ち込むものがない状況にある。しかし、ＢグループとＤ－１グループは対照的であり、Ｂグループは大学での人間関係を良いものにしようと思うあまり、女性同士のいざこざや、人間関係のこじれなどによって、大学での楽しみが見いだせなくなり、次第に学校不適応をおこしていった。それに対し、Ｄ－１グループは、そもそも大学での人間関係を構築することができず（構築する気がなく）、大学になじめず学校不適応となっていた。またＣ－２グループは、体育系大学に入学し、スポーツに思う存分打ち込むことができていることから、一見大学満足度は高いと考えられていたが、質問紙調査だけではわからなかった女子学生たちのより深い心の部分を知ることができた。自らの「女性らしさ」の欠如と、周りから女性的な扱いをされていないことを気にしており、「スポーツ女子」型に憧れを抱いていることが明らかとなった。しかし、Ｃ－２グループに関しては、これは体育系大学に所属する女性特有の、いわば個人の問題であることから、大学からの解決方法の提供は難しいと考えられる。

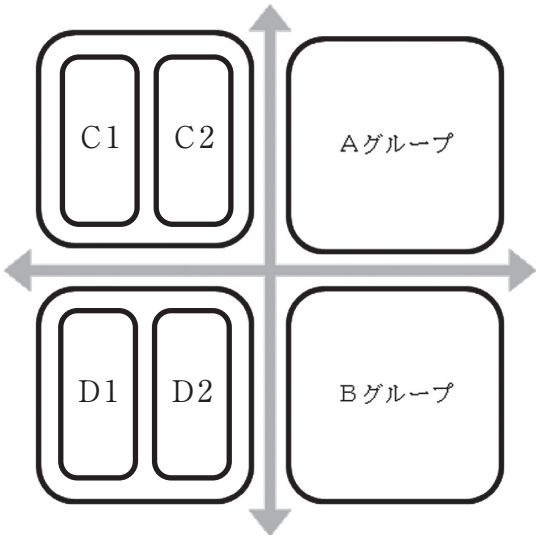

図2. S大学1年生の女子学生の
4類型と6タイプ

８．本研究の発見と限界

本研究を通して、今後の大学生の学校適応について、どのような意味があったのかについて検討したい。まず本研究での発見は４つあると考えられる。

①生きにくさ」の実態を明らかにした。
②2つの「コード」のもと女子学生を４種に分類、さらに「生きにくさ」の感じ方の違いから６種に分類した。
③それぞれの戦略的行動について明らかにした。

本稿の発見としては以上の４点が挙げられると思うが、やはり最大の発見は、Ｄ－２グループの戦略的行動を明らかにすることができた点にあると考えられる。Ｄ－２グループは、自らの打ち込めるものとして、ボランティア活動を取り入れ、ボランティア活動を通して出会った仲間や、相手先の施設の方々とのコミュニティができたことによって、それが自らの居場所となり、大学での適応に繋がった。今後Ｓ大学が生き残っていくためには、必ずしもスポーツが好きでない学生をも取り込む必要がある。そうしたときに、いかにしてスポーツ以外の「居場所」を作ることができるかが、女子学生の学校適応度を高めるために重要と言える。

今後、本稿で明らかとなった、学校適応度が低いとされたＢグループ、Ｃ－２グループ、Ｄ－１グループへの対応を考えていかなければならない。学生たちの居場所作りの場としてふさわしいものを、大学側からアプローチしていくことが重要である。

また、本稿での限界については、方法的な限界であり、それは２点挙げられる。

今回は、体育系大学に所属する女子学生に関する研究ということであったが、まだ大学に染まりきっていないと思われる１年生だけを対象に選んだ。しかし、2～4年生についても、同じような調査をするにあたって、より大きな発見に出会うことができたのではないかと考えられる。

また、インタビュー調査の際に、４類型に該当すると考えられる女子学生の、選出の仕方に多少の偏りができてしまっていたのではないかと考えられる。例えば、今回の調査ではＤ－２グループに属する学生の多くは、ボランティア活動に居場所を見出していたが、その他にもスポーツ以外の居場所が女子学生たちの間に形成されているかもしれない。そうした点については今後の課題としたい。

９．参考文献

・藤井義久,1998,「大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」心理学研究,第68巻, PP.441-448.
・羽田野慶子,2002,「『生徒文化のジェンダー分析』の課題と展望～欧米の研究動向をもとに～」, 東京大学大学院教育学研究科紀要　第42巻,PP,189-198
・広沢俊宗,2007,「大学新入生の適応に関する研究（Ⅰ）学習面での適応～不適応に関わる諸変数の検討～」関西国際大学研究紀要　第8巻,PP.121-138.
・宮崎あゆみ,1992,「女子高におけるジェンダー・サブカルチャー～女性性への適応と反抗の過程～」東京大学教育学部紀要第32巻,PP.170-177
・森康司,「スポーツ実践とジェンダー～大学生調査から～」
・下竹亮志,2013,「学校運動部に所属することの現代的意味」, 日本スポーツ社会学会福山大会資料
・鈴木翔,2012,「教室内(スクール)カースト」, 光文社
・谷島弘仁,2005,「大学生における大学への適応に関する検討」,『人間科学研究』
・武内清,1985,「女子の生徒文化の特質」教

育社会学研究　第 40 集,PP.23-34
・上床弥生,2011,「中学校における生徒文化とジェンダー秩序 「ジェンダーコード」に着目して」,『教育社会学研究』第 89 集, PP.27-48。
・山田真紀,藤原直子, 小川奈保子,「女子大学のエスノグラフィー～学生の意識と行動パターンに着目して～」PP.86-89。
・山口豊一,松嵜くみ子,市川麗, 長谷川恵,2014,「大学生の学校不適応に関する研究～大学生版 QOL 尺度の作成を中心として～」跡見学園女子大学文学部紀要第 49 号,PP.137-147